

初年次教育における「作文の技術」の指導原理(その2)

「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導を中心に

川 崎 清

【0】本稿の目的

本稿の目的は三つある。第一は、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導について、その指導原理と方法を考察し、作例を示すこと、第二は、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)指導の本質は、「他者視点の内面化」にあることを示すこと、第三は、「他者視点の内面化」という知的操作の過程を意識的に学習することは、「自己視点の自覚化・相対化」を促して、学生のものを見方を柔軟で複眼的なものにし、思考の幅を広げることを明示することである。

【0.1】本稿の構成

【1】では、本稿で扱う「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)を定義する。【2】【3】【4】【5】では、文部科学省により告示された小学校、中学校、高等学校の学習指導要領に示される「国語」の指導内容を確認し、検討する。本稿で論ずる作文指導の原理と方法は、学生が大学入学以前に学校教育において指導された指導事項を参照して構築するからである。【6】【7】では、大学初年次教育で「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)指導をする際の具体的指導手順を示す。【8】【9】では、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)指導の意義について論ずる。【9】の後に「作例」を示す。

本稿の主旨を早急に把握したい場合には、読者は【1】【8】【9】と「作例」を読み、その後【2】以降を読むことが可能である。

【1】「クリエイティブ・ライティング」とは何か

ことばは人間の思想、感情を他者に伝えるためのものである。思想とは様々な分野の事実や理論に関する人の(自分の)意見のことである。思想を語る方法は大きく分けると二つある。一つは思想を論説文として語る方法である。論説文では、意見と根拠を一式そろいで述べ、論理的に破綻のない結論に至る文章を作成することが目的となる。論説文では感情を表現することはしない。

もう一つの方法は思想を物語として語る方法である。物語とは「作者の見聞または想像を基礎とし、人物・事件について叙述した散文の文学作品(以下略)」(広辞苑)である。従って、思想を物語として語る方法においては、作者は登場人物をことばで造形し、その人物を物語の中

でいろいろな出来事に遭遇させて、その人物がその出来事の中でとる具体的な行動を描き、併せて登場人物の感情も描写する。そうすることで、人間としての強さや弱さ、美しさや醜さを描き、作者の思想と感情を語ることになる。

本稿では、作者の思想、感情を他者に伝えるために物語として文章を作成することを「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)⁽¹⁾と定義する。

【2】大学生が入学前に受けてきた作文教育:小学校段階の作文教育を中心に

大学生に作文教育を実施するには、大学生が入学前にどのような作文教育を受けてきたのか、それを把握しなければならない。従って、小学校、中学校、高等学校における作文教育の内容を調べる必要がある。初等中等教育は文部科学省が告示する学習指導要領に基づいて実施されている。それ故、現行学習指導要領、特に小学校学習指導要領の「国語」に示された「書くこと」の内容を確認する。小学校学習指導要領に特に注目する理由は、中学校及び高等学校の学習指導要領における「国語」の「書くこと」の指導事項は、小学校学習指導要領に示された指導事項と基本的には同じものであり、生徒の知的発達段階に応じて、小学校の指導事項を発展させ高度化させたものに過ぎないからである。

現行の小学校学習指導要領では「国語」の指導が「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の四つの言語活動に分けて、各学年の「目標」及び「内容」が示されている。以下に「書くこと」に関する部分に限定して、現行学習指導要領が示す「目標」「内容」と指導事項を紹介する。

まず各学年の「目標」に関わる部分を引用する。(下線は本稿執筆者による)⁽²⁾

〔1年2年〕

経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに、進んで書こうとする態度を育てる。

〔3年4年〕

相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら書こうとする態度を育てる。

〔5年6年〕

目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身に付けさせるとともに、適切に書こうとする態度を育てる。

上記の学年ごとの「目標」を見ると、1年2年ではまず「経験したことや想像したこと」を時系列に整理して文を書かせ、文章を進んで書こうという態度を養うことが目指されている。3年4年では、「調べたこと」に関して話題ごとに文をいくつか連ねて段落を作ることを学び、段落を単位として文章を構成する意識を養成することが目指されている。5年6年ではある主題(テーマ)について「考えたこと」を書くにあたり、文章全体の構成(例えば、結論、理由の順で

述べる、序論、本論、結論の構成とする等)を意識して書けるようにすること、そのために文章全体の構成に沿って段落の効果的な配置を考えて書けるようにすることが目指されている。

上述のことは「目標」を達成するために生徒に授業で取り組ませる具体的な言語活動を記述した指導要領の「内容」の部分を見ても明らかである。「書くこと」の各学年の「内容」に関わる部分を抜粋して以下に引用する。(下線は本稿執筆者による)⁽³⁾

[1年2年]

- ア 経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること。
- イ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。(以下略)

[3年4年]

- ア 関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べること。
- イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。(中略)
- エ 文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。(以下略)

[5年6年]

- ア 考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。
- イ 自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること。
- ウ 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり、詳しく書いたりすること。
- エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと。

これらを見ると、「目標」では「～の文章を書く能力を身に付けさせる」「書こうとする態度を育てる」と記述されていたことが、「内容」では「必要な事柄を集めること」「簡単な構成を考えること」「必要な事柄を調べること」「段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」「全体を見通して事柄を整理すること」などと具体的活動として記述されていることがわかる。また、「目標」には出ていない事項を取り出すと以下ようになる。3年4年で「敬体と常体の区別」をして書くことを学ぶこと、5年6年で「事実と感想、意見とを区別」して書くこと、他者の文章を「引用したり」、「図表、グラフなどを用いたりして」、自分の考えを効果的に伝える練習を重ねることが指導の「内容」となっている。

上記の小学校における「書くこと」の「目標」と「内容」に示された指導事項を見ると、中高そして大学において指導している事項が、小学校段階において、既にすべて出そろっていること

が理解できるであろう。

言うまでもないが、小学校の生徒は「国語」以外の教科に出てくる多くの学習事項を理解し、身に付けなければならない。それ故、大変に忙しく、小学校段階だけで「書くこと」の指導事項のすべてを理解し、身に付けるには至らないのである。

従って、中高の段階はもちろんのこと、大学の初年次教育の段階においても、小学校に出てくる指導事項を復習しながら、作文の基礎技術の意味を理解させ、それらを確実に身に付けさせる指導が必要なのである。

【3】小学生段階の作文指導における具体的指導法の例

小学生段階での作文指導においては、上述の指導要領の「目標」に沿うように国語科を中心に指導がなされる。その際、教師はそれぞれの段階の「書くこと」の指導にあたり、生徒に書かせる作文に名前を付けて、指導することがある。①「⁽⁴⁾したこと作文」②「⁽⁵⁾見たこと作文」③「⁽⁶⁾なりきり作文」などがそれぞれにあたる。以下にそれぞれの作文の指導内容を示す。

- ①「⁽⁴⁾したこと作文」では、生徒が「～した、～した」と実際に自分がしたことを思い出し、数え上げて、時系列に並べて書く。日記に近いといってもいいだろう。多くは直前の過去の事柄が記述され、読み手にはあまり面白い内容とはならない。これは書く材料を収集し、まとめていく準備作業的な意味を持つ。低学年の段階での指導となる。
- ②「⁽⁵⁾見たこと作文」では、生徒が「⁽⁴⁾したこと」のうち「⁽⁵⁾見たこと」を取り出して、人や動植物、事物の様々な動作、状態を書く。「⁽⁴⁾したこと」の記述だけで済ませるのではなく、⁽⁴⁾したことの経験から一歩踏み出して、そのときの周囲の世界を観察し、目にした事物を思い出して書く。これは作文の型を教えることにもなる。例えば、「～を見た」(話題提示文)→「よく見ると～だった」(事実文)→「そのようになっているのは～だと考える」(意見文)という型で文章を書く技術を指導することができる。

生徒が見るものは、その時その時で異なり、記述された人や事物の様子も多様である。見たもののうち何を書くかという選択に、書き手の独自性も出る。事物の中に何らかの事実を発見し、その発見で何を考えたのかを書くので、書き手が自分の思考を広げ、深める作業の意味もある。読む方としても面白く読める内容になる。この作文指導は低学年段階で導入してもよい。中学年では、積極的に導入し、生徒に自分のものの見方自体に注意する姿勢を持たせたい。

- ③「⁽⁶⁾なりきり作文」では、

ア) まず、生徒に身の回りにある物や動植物、あるいは他人になったつもりになるよう指示をする。

イ) 次に、なったつもりの物、動植物、他人の視点から、見える世界を記述させる。という手順で指導する。

この作文では、書き手は自分になったつもりで他者の視点から世界を見て、その他者の視点でその世界をことばで統一的に記述する。自分の視点から離れて、別の物(動植物、他人)が見ている世界をことばで構築することは、他者のものの見方や考え方を自分の中に取り入れて、人事万般に思いをはせることになる。それ故、他者のものの見方や考え方への想像力を育むことにもなり、人間関係や事物の関係を様々な角度から理解する力を開発し養うことにもなる。この作文指導の導入は、生徒が楽しく文章を書ける工夫があれば、低学年から導入してもよいであろう。

【4】小学生段階の作文指導から「クリエイティブ・ライティング」の指導原理へ

大学初年次における「クリエイティブ・ライティング」の指導原理はどのようなものを構想することができるであろうか。

学習指導要領に沿う形で「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導原理を構想するには、小学校(以降)で学んだ作文の技術の意味を指導者、学生の双方が明確に自覚する必要がある。

低学年での指導事項に「経験したことや想像したこと」を時系列に整理して書く、がある。なぜ、そのようなことができないといけないのか。それは以下のように説明できるであろう。文章を書くことは、その場には居合わせない他者(読者)に、まるでその場に自分と一緒に居合わせたかのように自分の経験をことばの記述だけで理解させることである。それ故、まずは他者が理解の道筋をたどりやすいように、時間軸という人間に共通する理解の枠組みを使って、事柄を並べて示す必要がある。「経験したことや想像したこと」を時間的に整理して述べるこの意味はそういうことである。

「したこと作文」で指導を展開すれば、その練習は大学生に対しても、物事の前後関係を考えて、その場には居合わせない他者に理解しやすいように事柄を整理させる意味があり、有益である。

中学年の指導事項に「関心のあること」から題材を選び、それについて「調べたこと」を相手や目的に応じて、段落としてまとめて文章にする、というのがあろう。なぜ、そのようなことができないといけないのか。「経験したこと」などから「関心のあること」を取り出すことは、その事柄のある側面に注意を払って見た結果、見えてきた事実を取り出すことを意味する。何を見たのか、発見したのか、その発見で自分が何を考えたのか、調べてわかったことは何かを、相手が理解しやすいように、自分の考えたことを小分けにして、そのそれぞれについていくつかの文を連ねて段落としてまとめる作業をし、その上で、その段落を関連づけて並べていく技術を自覚的に覚えなければならない。

前項に挙げた「見たこと作文」で指導を展開すれば、その練習は大学生に対しても、自分の思考をいくつかの小分けして、その小分けされた思考のそれぞれを文章で段落にまとめ、自分の考えを自分自身にとって明確なものにして、それを他者が理解しやすいように伝える訓練の

意味があり、極めて有益なのである。

高学年の指導事項に「考えたこと」から題材を選んで、目的や意図に応じて、全体の構成を考えて段落をまとめ、それらを理路整然と並べて文章をまとめることがある。なぜ、そのようなことができなければいけないのか。なぜなら、ある考えを他者に伝えるとして、それが実際の出来事について考えたことであれば、その出来事の起こる背景の情報や関係する人や事物に関する情報を集めて、その出来事を分析し、その結果をできるだけ客観的に叙述した報告文にまとめることになる。その場合には、最初に問題提起文、次に集めた資料を分析する文章、最後に分析結果を考察し結論として述べる文章、というように全体の構成(序論、本論、結論等)を考えて文章を作成しなければならない。この書き方の指導が、大学初年次においては主流となっている「論文・レポートの書き方」の指導である⁽⁷⁾。

上記の指導に加えて、実際には起こっていない出来事について、相手に伝える必要が出てくることもある。つまり、仮定として、あるいは、ある種のフィクションとして語る必要が出てくる場合がある。そのような時には、仮定の上での出来事を自分の視点から記述したり、別の人物の視点から叙述したりして、その出来事の全体像を他者に把握しやすい形で、文章全体の構成(導入部、展開部、終結部等)を考えてまとめなければならない。この場合は、とりわけ自分以外の他者からその出来事がどう見えるか、無理や破綻がなく統一的に叙述する能力を身に付けることが大事である。この面の指導に最適な課題が「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)なのである。

前項で挙げた「なりきり作文」で指導を展開すれば、その練習は大学生に対しても、自分以外の人物や事物になりきって、その人物や事物から世界がどう見えるかを統一的に叙述する練習をするので、「考えたこと」を伝えるための高度な技術(ここでは主として他者の視点を内面化すること)を錬磨できる課題となり、極めて有効で有益な作文練習となる。

【5】中高生段階の作文指導から「クリエイティブ・ライティング」の指導原理へ

中学校学習指導要領では、2年生の「書くこと」の指導内容として「描写」と「説明」という用語を使い、記述で使用する文章を二種類に分け、それぞれを使い分けるよう指示している⁽⁸⁾。更に、高等学校学習指導要領解説では「描写」と「説明」について、以下のように解説する。

「説明」とは、出来事や状態などを対象に忠実かつ正確に、順序や論理を追って読み手によく分かるように書く方法であり、事実や事柄、方法を具体的に説明する場合、手順や理由を論理的に説明する場合などがある。「描写」とは、物事の様子や場面、行動や心情などを、読み手が言葉を通してありありと想像できるよう描くことであり、情景描写、人物描写、心理描写などがある。説明の方法をとるか描写の方法をとるかは、記述の対象、相手、目的などによって異なるので、両者を区別し効果的に使い分けていくことが大切である⁽⁹⁾。

上記の「描写」と「説明」の使い分けを具体的に理解するため、太宰治作「走れメロス」の冒頭を例にとり、確認する。

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮らしだ。この妹は、村の或る律気な一牧人を、近々、花婿として迎える事になっていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。先ず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかったのだから、訪ねて行くのが楽しみである。(「走れメロス」 太宰 治⁽¹⁰⁾ 作)

この冒頭を「描写」と「説明」に分けると、以下のようになる。

心理描写： 下線部が「メロスの心理描写」になる。3文しかない。

人物描写： 「メロスには政治がわからぬ。～人一倍に敏感であった」までが「メロスの人物描写」。

説明： 「きょう未明メロスは～はるばる市にやって来たのだ」までが「メロス登場の場面説明」、「メロスには父も、母もない。～妹と二人暮らしだ」までが「メロスの家族関係の説明」、「この妹は～、都の大路をぶらぶら歩いた」までが「メロスのシラクス市訪問の目的説明」、「メロスには竹馬の友があった。～訪ねてみるつもりだ」までが「メロスの友人関係の説明」。

太宰は、メロスの「心理」と「人物」を「描写」し、メロスを取り巻く諸事情を「説明」で印象的に読者(他者)に伝えることに成功している。

この「描写」と「説明」の区別とその使い分けも、既に中高で指導されている事項なのであるが、大学生で自覚している者は少ない。従って、大学における「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導で「作文の技術」として徹底させなければならない。「書くこと」を通して、「描写」と「説明」の区別を覚え、その使い分けに敏感になると、文芸作品はもとより様々な文章を味読する能力も発達し、極めて有益である。そして、その味読の能力が、また、書く能力の増進につながるのである。

以上、前項【4】と本項【5】の考察を踏まえると、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導原理は、学生たちが小学生、中学生、高校生のときに学習した作文の技術を踏襲し、そ

れらを発展させ、高度化させる指導を体系化したものが合理的な指導原理となると思われる。具体的には、a)作文の技術として「したこと作文」「見たこと作文」「なりきり作文」のすべてを動員させる、b) 叙述にあたっては「描写」と「説明」の区別をさせる、c) 自分の視点、他者の視点という視点意識を持つようにさせる(視点については【8】で詳述する)、d)それらの視点から見て矛盾や破綻のない文章を作成できるようにする、e)作者の思想、感情を他者に伝えるために物語を創作させる無理のない課題と指導手順を有する、というa) b) c) d) e)のすべてを含む指導が「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導原理の内実をなす。a) b)が小中高での学習事項の踏襲であり、c) d) e)がそれらの発展と高度化になる。次項では、指導手順を検討する。

【6】「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導手順(その1)

【2】で見たように、小学校学習指導要領では、3年4年で「相手や目的に応じて」文章を書き、5年6年で「目的や意図に応じて」、文章を書く練習をすることになっている。文章を書く際には、「相手」によって語彙の選択や文体が異なる。また、感謝、抗議、謝罪、説得、激励等、書く「目的」によっても語彙、文体を調整しなければならない。従って、「相手や目的に応じて」適切に文章を書く練習は必須である。また「目的や意図に応じて」の「意図」は書き手の意図ではなく、読み手が文章をどのように受け取るかに焦点がある⁽¹¹⁾。従って、「意図」に依らずとは、相手の受け取り方に配慮して、叙述を詳細にしたり、簡素にしたり、婉曲に述べたり、断定的に述べたり、叙述を調整することを意味する。

上で述べた様々な面を練習する課題としては、「手紙を書く」課題が最適である。手紙は、特定の「相手」に向けて、特定の「目的」で、そして相手がその手紙の文章をどのように受け止めるか、その「意図」を十分に考慮して書くものだからである。

以上の考察に基づいて「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導を構想すると、まず「学生に手紙を書かせる」ことから始めることになる。そして、次に「その手紙を物語の中にうまくはめ込み、物語として全体をまとめさせる」という指導手順が考えられる。具体的な手順としては、以下の二段階に分けて指導する⁽¹²⁾。

- ①ある状況に身を置く相手に手紙を書く(800字～1200字)(一コマの授業時間で書けるところまで書かせる。)その後②の課題を宿題として課し、完成作品を2週間後に提出させる。
- ②相手がその手紙を読む前の状況(before)と、読んだ後の状況(after)を、その手紙の中に織り込んで、全体として物語となるように話の筋を工夫して書く(2000字～8000字)

というものである。

- ①の課題として例を示すと、以下の状況に身を置く人物になりきり、その条件を満たす内容

の文章を書くよう学生に課す。(なお、課題に出す状況を学生から募集すると面白い想定
の課題が得られると思う。童話やSFを書きたい学生は案外多いので、それにふさわしい設定を募
るのもよい)

- 問題1) いま大学3年生であると仮定して、大学受験に失敗した後輩に、激励する目的で
手紙を書く。性別を変えて書く。男子であれば、自分を女子大生になったつもり
で、後輩の女子受験生に対して書く。女子であればその逆の想定で書く。
- 問題2) 交際中の相手から別れを言い渡された友人に対して、慰めと希望を与える目的で
手紙を書く。
- 問題3) 大学2年生であるが、結婚を申し込んできた同級生に対して、それを思いとどま
らせる目的で手紙を書く。ただし、相手の気持ちを傷つけない文面になるように
気を付ける。
- 問題4) 職場の上司や同僚の言動にいらだち、周囲の人と馴染めずにいる後輩に対して、
周囲の人との摩擦を避けながらも、自立して行動する心構えを助言する目的で手
紙を書く。(職場や職種は自分で考え、それに合わせて手紙を書くこと)

ここでは問題4)を課題として選び、その作例を【6・1】として【9】の後に示す。

【7】クリエイティブ・ライティング(文芸創作)の指導手順(その2) 作例について

①の課題の手紙を書かせたあとで、②の課題として、その手紙を相手が受け取る前の状況
(before)と手紙を受け取り読んでからの状況(after)の対比を考えて書くよう指示する。手紙を
間に入れて、全体として物語として読めるように文章をまとめさせる。相手になりきり、手紙
の書き手になりきって、それぞれから世界がどのように見えるのか、矛盾のない統一的な叙述
になるよう注意して書くことに重点を置いて指導を進める。

問題4)の「手紙」を作中に織り込み短編小説にまとめた作例を【7・1】として【9】の後に示す。
(できれば作例本文を先に読み、次いでこの項の解説を読むようにされることを望む)

作例の短編小説について簡単に解説を付す。

【作例解説】登場人物は以下の3人。

- 1) 大学の図書館司書として勤務する女性
- 2) 図書館長の老齢の男性教授
- 3) 花道師範
- 4) 語り手 (表面には出て来ない。語り手=作者ではない。念のため)

話の筋は、教養のある有能な女性司書が、図書館学の心得もない図書館長の罪のない言動に

いらだち、生活のリズムを崩しがちという悩みを抱えている。その悩みの解決法を花道師範から伝授されるというもの。

【人物造形】作中で以下のように人物造形がなされている。

- ア) 主人公、図書館司書、佐々木浩子、20年以上同じ職場に勤続、40代後半、女性、生真面目、大学時代失恋経験あり、小旅行が趣味だった、図書館長である無知な老教授に苛立っている、
- イ) 図書館長、川浪博、60代後半、無知なくせに知ったかぶりをする、生活は楽ではなさそう、
- ウ) 花道師範、氏名不詳、50代後半から60代初め、教養がある、英語もわかる、人の心を洞察できる、
- エ) 語り手、作中人物として表面に出ることはない。3人の登場人物と状況説明をする。

【8】「クリエイティヴ・ライティング」(文芸創作) 指導の意義

学生が「クリエイティヴ・ライティング」(文芸創作)に取り組むと、どのような効用があるのだろうか。その点を以下で明らかにしたい。

その効用を一言でいえば、「他者視点の内面化」を意識的にできることである。文芸創作では、すべてのことばが物語の理解に貢献するように使用される。人物であれ場面であれ、読者(他者)に、どのような情報を、どのような順序で、どの程度提供すれば理解が可能となるか、作者は常に考えて叙述しなければならない。作者が一語一語記述するごとに読者(他者)の理解が組み上げられるように表現しなければならないのである。それは作者が、他者はどのような情報があれば当該の事柄を理解できるかを計測することである。作者にその計測を可能にするのが「内面化された他者視点」なのである。そして「内面化された他者視点」は、別言すれば、想像力の源泉、あるいは想像力そのものといえる。

ことばの指導では、ことばを論理的に使用しなければならない点を理解させることが一番重要である。この点は、「クリエイティヴ・ライティング」(文芸創作)と「論文・レポート」の書き方の両者において全く同じであり、不変である。「クリエイティヴ・ライティング」では、「描写」であれ「説明」であれ、作者は「内面化された他者視点」を通して、つまり「想像力」を駆使して、物語(小説)世界を矛盾なく論理的に叙述し物語を進める。同様に、「論文・レポート」を執筆する際には、執筆者は、どのように論を進めれば、読者(他者)が理路をたどれるのか、「内面化された他者視点」を通して自分の論点を構築し論述を進めるのである。

ここで言う「他者視点の内面化」あるいは「内面化された他者視点」は、実は、我々は普段無意識に発動させ実行しているのである。人の話を聞き、あるいは本を読み、我々はその内容を理解する。その理解が成立するのは、話を聞きながら、あるいは読みながら、我々が語り手や書き手の視点を自分の内面に取り込み、その視点から事物や出来事を見ることができるよう

なるからである。

しかし、「他者視点の内面化」という知的操作の過程は、自分の母語による「聞く、読む」という受動的言語活動では、通常意識されることはない。外国語であれば、受動的な言語活動においても、語と語、語句と語句の意味関係を把握するときに、言語構造の違いがあるので、意識的な努力を払わなければ理解はできない。そして構文的な理解ができた上で、語り手や著者が「何をどのように描いているか」という「ものの見方や視点」に改めて注意がいき、その視点を内面化させる意識が発動されて、話や本の内容を理解するのである。

「他者視点の内面化」という知的操作の過程は、母語の場合には、特に「書く」という能動的な言語活動を通して始めて自覚的に学習されるのである。なぜならば、「書く」とときには、我々は、ア)一語一語を吟味して選び、イ)それらを文法的に整えて並べ、ウ)伝達意図に沿った意味表現を構成しようと努め、エ)場面に最適な表現となっているか、その表現が他者にどのように受容されるのか、を慎重に計測する、からである。その計測意識が発動されているさなかで「他者視点」は内面化され、自覚的に学習されるのである。

「言語表現に内在する視点」が自覚的に内面化されるには、母語であれ外国語であれ、上記のア)～エ)の意識的努力が必要なのである。それらは、専門的には、ア)語彙的選択、イ)文法的選択、ウ)意味的選択、エ)語用論的選択⁽¹³⁾と呼ばれるものであり、「書く」とときには自覚的になされる選択である。なお、ア)～エ)の選択は、この順番になされるわけではない。同時並行的になされて、言語表現を場面に最適なものにするのである。

次の例で説明する。小売店で身内には「今日は5時で閉店する」で済ますところを、客に対する発話(掲示)では「本日は5時にて閉店させていただきます」とする場合である。「今日・は」に替えて「本日・は」、「5時・で」に替えて「5時・にて」とやや格式ばった語彙や表現を選び(語彙的選択)、「する」という一方的な宣言に替えて「させ・て・いただき・ます」と使役語、謙讓語、丁寧語を重ねて(語彙的選択)、正しく活用させて接続し(文法的選択)、伝達意図に沿った「許可を得て～します」の意味にする(意味的選択)。そして、表現全体を「場面に最適な」、客に対し失礼のない、丁寧な表現にする(語用論的選択)のである。このとき、これらすべての選択を統御しているのが、話者(書き手)の心内で発動する「他者から見れば、自分の発話はどう受け取られるか、という意識」である。発話の(書く)たびに、「他者から見れば、の意識」を発動させて、これら四つの選択を統御する経験を重ねることで、話者(書き手)は、自分の心の中に「他者視点」を「内面化」するのである。

以上の検討から理解されるように、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)では、学生は「書く」という能動的言語活動を通して、他者が理解しやすいように、ことばを正確に、そして効果的に使うことの難しさを体験する。それとともに、その難しさを克服し場面にぴったりの表現を組み立てられた時の楽しさも体験する。このような体験を重ねながら、他者に自分の認識や世界観を伝えるには、「他者視点の内面化」を図らなければならないことを自覚的に、

そして徹底的に学ぶのである。

上記のことに加えて忘れてならない大事な点は、「他者視点の内面化」がなされる時、同時に「自己視点の自覚化」もなされることである。こうして、学生の頭の中で「他者視点と自己視点」が対照されることで、学生の「自己視点の相対化」が結果として実現する。つまり、学生は「自分のものの見方」が唯一のものではないことを体験として実感をもって学び取るのである。「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)は、このようにして学生の「ものの見方」を柔軟で複眼的なものにし、思考の幅を拡大するのである。

【9】おわりに

大学初年次教育においては、まず「論文・レポートの書き方」を指導するのが常道である。本稿執筆者も、意見と根拠を一式そろえて述べ、論理的に破綻のない文章を書けるようにすることを指導の第一目標とすることに異論はない。しかし、その目標に加えて、指導者が作文指導において更に一步を進める哲学と方法論を持つことが必要であると考えている。なぜならば、本稿で論じた「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)を実践すれば、学生にことばを使う楽しさや喜びを知る体験を提供でき、学生が「書くこと」に対して積極的に取り組む態度を身に付けることを促進できるからである。また、そのような態度が身に付いていれば、後の大学生活や社会人になったとき、相手や目的に応じて、自分の思想や感情を伝える効果的な文章を書くことに意欲的に取り組むことができるからである。

本稿では、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導の意義を明らかにした上で、指導案を作例とともに示した次第である。

最後に、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の評価について以下に簡単に試案を述べておく。

【評価】印象評価法を採用する。観点は「構成・まとめ」「人物造形」「面白さ」の三つとする。

ア)「構成・まとめ」

物語の導入部、展開部、終結部といった構成があり、話としてまとめがある。

この尺度で5段階評価する。

イ)「人物造形」

登場人物の人となり理解できるように、性格、年齢、職業、行動の癖などの情報が必要に応じて過不足なく提供されている。この尺度で5段階評価する。

ウ)「面白さ」

人間や社会についての理解が深まり、とても面白くためになる。

この尺度で5段階評価する。

【6・1】【問題4）の「手紙」の作例】

Aさん、あなたは仕事ではいつも難しい課題に積極的に取り組んでいますね。先週も図書館の来館者を増やすための企画を上手にまとめたそうですね。Aさんの仕事ぶりには何をやらせても華麗で凛としたたずまいがあり、私も本当に感心しています。でも一つだけ心配なことがあるのです。一言でいえば、Aさんは潔癖すぎるのです。大学、あるいは企業はいろいろなタイプの人を採用し、お互いが個性を發揮しあい、自分にはないものを補い合って、仕事を進めていくのですね。Aさんは周囲の人を圧倒する鮮やかな構想のもとに仕事をなさることが多いですね。でも、その有能さの故にAさんからは周りの人の仕事ぶりがまどろっこしく感じられ、職場の人とうまくお付き合いができないこともあるのではないのでしょうか。

いつぞやお話ししてくれたお勤め先のことですけど、Aさんを煩わせている図書館長さんは学生さん以上に扱いや指導に手間のかかる人ではあるけれども、お勤め先の世界を構成している一員なのですね。枯れ木も山の賑わいというではありませんか。私が教えている生け花でたとえば、色あでやかなお花と一緒に枯れ木や病葉を活けることがあり、互いに引き立たせるのです。そのように、有能な司書であるあなたは、図書館長さんの居場所をつくって差し上げるくらいの心の余裕を持ちましょう。でも、言うはやさしいけれども行うは難しいこと、ですね。

それができるコツをお教えしましょう。三つあるのです。一つ目は、日常の何でもないことの中に喜びの種を見いだすことです。そうすると心の余裕が生まれます。駅のホームに着いたら、すぐに電車がきて乗れた、とか、職場に着いたら、おはようございます、と会う人にほがらかに言えたとか、そういうことを喜ぶのです。Ordinary events in your lifeが大事なのだと私は大学時代の英語の先生に習いましたが、その意味がやっと今頃身に染みて分かるようになりました。二つ目は、毎日身のお掃除をすることですね。勿論大掃除はしなくてもよいのです。机の上とか、部屋の隅においてある不用なチラシや新聞雑誌などを片づけるのです。身の回りに不用なものを溜めないよう捨てるのがポイントです。こうすると気持ちがすっきりしてくるから不思議です。そして三つ目は、今自分は満足しているか、と自問するのです。満足していないならば、何をどうすべきか、更に自問します。そうすると、すべきことの方向性が見えてきます。はじめの二つのことをした後に、三つ目の自問をすることで、心を鎮めて冷静に自分を見つめることができるようになるのです。

このように心がけてとりあえず一週間すごしてみてください。そうしたら、どのような心境の変化があったか、またお話ししてください。(1145字)

一コマの授業内で、「なりきり作文」で書けるところまで書かせて、あとは②の課題を自宅で書いて、2週間後に短編小説として完成させて提出するように指導するのである。

【7・1】【 問題4)の「手紙」を作中に織り込んで短編小説としてまとめた作例 】

司書 佐々木浩子の憂鬱と救済 (短編小説)

佐々木浩子は都内某所にある私立大学図書館に勤める司書であった。司書は高校時代からなりたい職業だったので、今の身分に不足はなかった。しかし、最近は気分がすぐれない日が続いていた。図書館長に川浪博教授が再任されたという知らせが耳に入ったからである。

川浪は別に意地悪な人間ではなかったが、人の感情への洞察力が欠けていて、時にいらいらとさせられて困ることもあったのである。川浪が普段何を買ひ、何を食べているかなどに他人は何の関心も持たないのが普通だが、川浪にはそのことが理解できないらしく、図書館に来ては、浩子に昨夜はサバの味噌煮を食べたとか、キスの干物がおいしかったなどと話すのである。浩子はそのような話にどう応じてよいものやら、返事に窮す場面もあった。というのも川浪は買った食べ物の値段をいちいち言うからである。

「佐々木さん、昨日は夜十一時にマルエツに行ったら、半額のサバが残っていて買いましたよ。サバの切り身が二枚入って百九十八円でした。今日と明日はサバを食べますよ、はっはっはっは」

このような調子なのである。わざわざ深夜にスーパーに出かけて半額の商品をあさる川浪に哀れを感じもするが、このような場合どう返事をしたものか分からなかった。

「それはよかったですね。サバはおいしいでしょうね」

などとあたりさわりのない返事をするしかなかった。その返事をした後、どっと疲れを感じるのであった。こんな話題に応じるために神経を使わされて腹が立ちもした。もっと図書館長としての本来の仕事をわきまえて欲しいと切に願った。

しかし、思い返してみると川浪が食べ物の話を自分にしてくる理由に思い当たるふしもあった。もう二十年ほど前のことだが、浩子は川浪に恥をかかせてしまったことがあった。川浪が研究図書として「メニューで学ぶフランス語」「メニューで学ぶイタリア語」という語学書を購入申請したときのことである。川浪は図書が届いた連絡を受けて図書館カウンターに受け取りに来た。その時、浩子は何の思惑もなく質問をした。

「川浪先生はフレンチは何がお好きなのですか、イタリアンは何を召し上がるのかしら」

川浪は浩子の顔を驚いたような眼差しで一瞬見たが、すぐにうつむいてしまい、やがて小声で言った。

「私はほとんど外食しないのです、、、、ですから、何を好きかと言われても、、、」

川浪は消え入るような声でそれだけ言うと、図書を抱えるなり、逃げるように図書館を出て

行ったのである。浩子は悪いことをしてしまったと思った。四十代後半の稼ぎごろの年代に達しているながら、川浪はよれよれのスーツを身にまとい、襟の擦り切れたワイシャツを着て、しわのよった同じネクタイを毎日締めて通勤して来るのである。少し考えれば、川浪がフレンチやイタリアンとは無縁の生活をしていることは明らかなのだ。浩子はこの時は自分も想像力を働かせなければいけないと深く反省したものであった。

恐らくこの件が川浪の心に深い傷を残しているのだろう。川浪は自分の暮らし向きの姿を披露することで、高級な食生活には無縁であることをあらかじめ伝えておき、買いかぶられることを回避しているのかも知れない。スーパーで半額の食品を買いあさっていることなどわざわざ話題にする川浪の行動を憐れみを込めて浩子はこのように解釈した。

この二年間、浩子は川浪とは司書と図書館長という立場で業務を担当してきた。川浪とは二十年以上同じ大学を職場として過ごしてきたが、図書館関連で仕事をするのは初めてであった。一緒に仕事をしてみて、川浪が図書館の業務や書籍のことをほとんど知らないことに驚かされた。図書館学が専門ではないとはいえ、日本十進分類法ぐらいは理解しているだろうと思ったが、その名前を知るのみで、中身は理解していなかった。

「川浪先生、日本十進分類法は、図書を整理する原則なのですが、目的が三つあります。一つ目は検索や蔵書管理のための『書誌分類』として使います。二つ目は請求記号として資料を書架に並べる際の『書架分類』として利用します。三つ目は背表紙に貼るラベルに印字して排架作業の便宜のために使うのです。この三つの目的をきちんと憶えてください」

浩子は川浪にこの程度のことから指導しなければならなかった。それは年齢差を考えると、あれこれと言にくいことであり、余計な神経を使うことであった。川浪の無知が憂鬱の種であった。

大学教員には知ったかぶりをする人間が多いが、川浪もその例にもれなかった。川浪が知らなくてもいい分野にまで、知ったかぶりをするのである。先日も朝に図書館で顔を合わせて挨拶を交わしたあと、川浪が声をかけてきた。

「佐々木さん、今日のファッションは素敵ですね。エビちゃんのファッションを採り入れたのですか」

このような問いを向けられると、浩子には怒りが込み上げてくるのであった。川浪はエビちゃんが誰か知るはずはないし、その知らない人がどのようなファッションを身につけているかも川浪は勿論知らないからだ。それに「今日のファッションは素敵ですね」などというのは無内容で褒め言葉になっていない。カラーコーディネーターがいいとか、トータルの印象がフェミニンでオリエンタルな装いですね、くらいのことが言えないのだろうか。きっと日本十進分類法の場合と同じで、名前のみどこかで聞きかじり、その浅薄な知識で世を渡ろうとしているのだ。そんな魂胆に付き合わされて、朝からくだらない質問に応じるために神経を使われるのは本

当に疲れるのであった。

「いいえ、川浪先生。私の年齢になると雑誌のモデルさんを参考に服を選ぶことはもうほとんどしません。エビちゃんとか桐谷美玲さんとかモデルさんを見てファッションを選ぶのは若い人なのです。」

面倒臭さをこらえてやっとの思いで浩子は答えた。こんなことが朝から起こるのはついていないと思わざるを得なかった。もっと図書館本来の業務に頭を使ったかった。憂鬱が一段と募った。

浩子は気が沈んだとき、どのように気分を転換するか分からずに苦勞する場面が多かった。しかし、大学三年の冬に気分転換の方法を偶然見つけたのである。浩子は想いを寄せた上級生に裏切られ、彼のことを忘れようとしていた。苦しい想いを断ち切ろうと夢中に行動したら、結果としてそれが小さな旅となっていて、その旅から帰ると気持ちがリセットされたのであった。

大学三年生であったその日、浩子は朝六時に家を出て、行き先も考えずにバスに乗り、N駅に着いた。乗った電車に運ばれて、幾度か乗り換えたが、気がつけば安房勝浦の興津まで来ていた。午後一時になっていた。興津駅を降りて十五分ほども歩くと海岸にでた。夏場なら大勢の海水浴客で混雑して歩くのもままならない場所であろう。しかし、冬の海岸には人もほとんどいなかった。沖からの風に吹き押されて打ち寄せる波が寒々しく見えた。風の吹く音は物悲しく、海の泣き声のようであった。浩子は砂浜に両膝をついてしゃがみ込み、両手で砂を掘った。すぐ手前まで波が打ち寄せる場所なので、砂が水気を含んで締まっていて力がいった。二十センチほどの深さの穴になったところで手を止めて顔を上げた。海の方を見た。波がつぎつぎに打ち寄せて波打ち際で無数の泡になってはじけている。泡がはじけると波は勢いよく退いて行った。磯のにおいが鼻孔を満たした。浩子は上級生からもらった手紙と一緒に写した写真をすべて鞆から取り出し、やぶって細かくちぎり、掘った穴に入れた。穴のまわりに掘られた砂が盛り上げられていたが、その砂を手の平で押して穴にかけていった。穴がすっかり埋まると、沖の方に顔を向け、自分の恋に別れを告げた。

この小さな旅から帰ると不思議にも恋の痛手は随分とやわらいで、なんとか日常生活に戻ることができるようになっていた。以来、気分をリセットするときは小さな旅に出るようになったのである。

しかし、就職をすると小さな旅でさえもなかなかできなくなった。仕事の上で気の重い日々が続くとき、旅に代わる気分転換法を見つける必要があった。何か気分転換になるよい方法はないかとあれこれ試すうちに、これと決められないで月日はたち、気が付けば二十年もたってしまった。

そこで今度こそはと思いついて、浩子は今年から草月流の生け花教室に週に一度通いだした。そこは女性師範の主催する教室で、自分の他に二十代OLが二名、四十代のOLが三名、年配の主婦が一名いた。それぞれが和室の畳に正座し、花器を選び自分の前におく。花の種類を選ぶ。その花を剣山に刺し、葉のついた細枝や草の茎を花が引き立つように剣山に刺していく。花の色と葉の緑色の量的バランスを見ながら、同時に枝ぶりの左右のバランスを判断して、それなりの作品に仕上げると、あっという間に一時間はたってしまうのだ。そして後は和菓子を食べながらお茶をいただいて、師範から講評してもらうのである。

今日、浩子はネコヤナギを花材に選んだ。まだ開いていない茶色のつぼみがいくつつついてる枝を三本、つぼみの先が割れて中から白い毛の花穂^{かすい}がついている枝を二本選んだ。その五本の枝が天に向かって伸びていくように剣山に刺した。二本の枝の角度をやや左右に開くように変えたあと、真っ白の小さい菊を下方にあしらひ足元をひきしめた。今の自分の心の様子を枝の動きに託したつもりであった。

師範の講評の時間になった。

「佐々木さんは今日、敢えて難しい花を選びましたね。枝にいきなり花が咲く花材を扱うには豊かな構想力と十分な技量が必要です。佐々木さんの生け花は、のびやかに縦に伸びている三本の枝が中心軸となり、左右に広がる二本の枝と一緒に空間に輪郭を与えています。この構図が空間を引き締めるのです。またネコヤナギを使った時には足元がさびしくなりがちなのですが、その足元には小さな白菊が左右に十分に盛り付けられていて、とても安定しています。基本を踏まえながら、思うままに心を花に託すことが出来ていますね。見る人にも安らぎを与える生け花になっていると思います。上達しましたね」

師範は浩子が恐縮するほど褒めてくれた。

「ありがとうございます」

浩子は抹茶の苦みと羊羹の甘さを味わいながら、師範のことは嘸みしめた。とても嬉しかった。

浩子には一つ困った癖があった。通勤電車に乗っているとき、混雑した車内で本を読んでいる人がいると、その人を良い人と決め込んでしまうのだ。週刊誌やスポーツ新聞などを読んでいる男はスペースをとるので、その分だけ迷惑で腹立たしかった。しかし、混んだ車内でも単行本や文庫本を読もうと頑張る男と並び合わせると、浩子はその男を好意的に思い、「えらいわね」と心の中で応援してしまうのである。そこまではいいのだが、浩子は男が何を読んでいるのか知りたくなり、横目で本を覗き込み内容を確認することもしばしばであった。しかし、読んでいる本が下品な内容のものと分かると、好意的に見てあげた分だけその男に裏切られた気がして「このバカ男！」と声に出して言いそうになるのであった。行きも帰りもこのような裏切り男に会った日は、日本の未来はこれで大丈夫なのかと思い、憂鬱になった。

また生け花教室の日になった。今日は師範が稽古の後で話があるという。師範は他の生徒を帰した後、再び和室に正座して、部屋に残っている浩子と向き合い、口を切った。

「先週はネコヤナギを花に選ぶなど、難しい課題に積極的に取り組んでいましたね。今週は花材に小手毬と黄色いバラを選び、上手にまとめました。佐々木さんの生け花にはどれもあでやかさと凛としたたずまいがあります。佐々木さんの上達ぶりには私も本当に満足しています。でも一つだけ心配なことがあるのです。一言でいえば、潔癖すぎるのです。生け花は部屋に自然を採り入れ、忙しい生活でささくれた心に潤いをもたらすものでもありますね。佐々木さんの生け花には勢いのある花材が選ばれて、色鮮やかな小花や艶やかな^{みどりば}緑葉で足元をまとめる構図が多い。でも自然には枯れてしまった花や枝、先枯れの葉や病葉^{わくらば}もあります。自然には誕生と成長、そして死もあるのです。また死があるから再生があるのです。どれも命の在り方で、どれか一つを欠いても自然の写しとしては不十分になります。今度は色あざやかに咲く花に加えて枯れ枝や枯葉も採り入れて活けてみてください」

師範がまっすぐに自分の眼をみて諭してくれるので、ことばが浩子の心にじかに届くのが分かった。

浩子は師範のことばに応えた。

「先生、わかりました。私は自分の生活の中で生まれるもろもろの憂鬱さを払い落とたくて生け花を始めました。美しいものを見て、美しいものを造れば心が澄んで楽になると思っていたのです。うまく活けられれば嬉しいし、褒めていただいたときには達成感もありました。でもまだ本当にすっきりと心が晴れやかになったとは実感できないでいたのです。今、先生に言っていたいただいて、自分に足りないものが理解できました」

師範は続けて言った。

「お勤め先のことばもいつぞやお話ししてくれましたね。佐々木さんを煩わせている図書館長さんも学生さん以上に指導に手間のかかる人ではあるけれども、この世を構成している一員なのです。まさに枯れ木も山の賑わいなのです。生け花に枯れ木や病葉を活けることがあるように、図書館長さんの居場所をつくって差し上げるくらいの心の余裕を持ちましょう。言うはやさしいけれども行うは難しいこと、ですね。それではコツをお教えしましょう。三つあるのです。一つ目は、日常の何でもないことの中に喜びの種を見いだすことです。そうすると心に余裕が生まれるのです。駅のホームに着いたら、すぐに電車がきて乗れた、とか、職場に着いたら、おはようございます、と会う人にほがらかに言えたとか、そういうことを喜ぶのです。Ordinary events in your lifeが大事なのだと大学時代の英語の先生に習いましたが、その意味がやっと今頃身に染みて分かるようになりました。二つ目は、毎日身の回りのお掃除をすることです。勿論大掃除はしなくていい。机の上とか、部屋の隅においてある不用なチラシや新聞雑誌などを片づけるのです。身の回りに不用なものを溜めないよう捨てるのがポイントです。

こうすると気持ちがすっきりしてくるから不思議です。そして三つ目は、今自分は満足しているか、と自問するのです。満足していないならば、何をどうすべきか、更に自問します。そうすると、すべきことの方向性が見えてきます。はじめの二つのことをした後、三つ目の自問をすることで、心を鎮めて冷静に自分を見つめることができるようになるのです」

浩子は師範の整然とした話しぶりに圧倒されていた。話の内容にはもっと心を揺さぶられていた。確かに浩子は日常のこまごまとした事柄にいちいち気を留めることはしていなかった。注意を払う余裕がないからであった。言われてみれば、今朝は通勤電車に乗ると、前に座っていた人が次の駅で降りて、自分が座れる幸運にめぐりあっていた。大学に着くと、門衛さんがきちんと目礼してくれて嬉しかったのだ。このことを喜ばなくては確かにもったいないと気が付いた。また、今の自分の部屋は片付いているとは言えなかった。机の上には書類が積まれており、必要な書類をすぐに取り出せない状態であった。やればすぐに片づけられる分量なのに、片づけを後回しにしてしまっていて、書類の山が目に入るたびに罪悪感にさいなまれていたのだ。毎日少しずつでも片づけていればさぞや机の上も心の中もすっきりとしていたに違いない。気持ちにゆとりがないので、図書館長の川浪先生にもつっけんどんに接してしまった。川浪先生、傷つけるつもりはなかったのです。心に余裕がなくて、乱暴なことを言ってしまいました。許してください。浩子は心の中で深く反省していた。師範のことばが浩子の心の深いところに届いたからであった。

師範は心の中を確かめるように浩子の瞳を見つめて、ことばを継いだ。

「佐々木さんはまじめでまっすぐな性格ですから、きっとわたくしの言ったことを素直に受けとめてくださるわね。もし思い当たることがあり、やってみようと思われたら、すぐに実行してくださいね。それでは今日はここまでにいたしましょう」

浩子は師範の眼差しがあたたかく自分に注がれていることを感じて胸が熱くなった。ここまで親身になってくれる人がいるのだと思うと、人生を前向きに歩んでいける気持ちになっていた。

「先生、ありがとうございました。本当にここまで私のことを心配していて下さり、感激いたしました。さっそく始めます。お話しを伺っているうちに、今日の嬉しい出来事のことを思いつきました。家に帰りましたら身の回りも片づけます。今日はためになるお話しをありがとうございました」

浩子は師範の家を出て、家路についた。白猫が浩子の歩く前を足早に横切った。 (完)

(6926字)

(注)

- (1) 随筆、詩歌、戯曲も文芸創作であるが、本稿では除外する。
- (2) 小学校学習指導要領 第2章 各教科 第1節 国語「書くこと」の「目標」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm (検索日2016.9.14)
- (3) 小学校学習指導要領 第2章 各教科 第1節 国語「書くこと」の「内容」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm (検索日 2016.9.14)
- (4) この指導法の命名者は特定できない。現場で自然発生的に命名されたものであろう。
- (5) 上條晴夫氏によりこの指導法が「見たこと作文」と命名され、指導法が開発された。
- (6) 野口芳宏(1988)『作文で鍛える(上)』明治図書 P.130。
- (7) 川崎清(2015)「初年次教育における『作文の技術』の指導原理とその実践」『経営論集』文京学院大学経営学部紀要第25巻第1号、pp.27—49。において「論文・レポートの書き方」の基礎となる論理の流れを作る「作文の技術」の指導実践を報告した。
- (8) 中学校学習指導要領 第2章 各教科 第1節 国語 第2学年「書くこと」の「内容」ウ
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/koku.htm (検索日2016.9.14)
- (9) 高等学校学習指導要領解説 国語総合 「書くこと」の「指導事項」ウ)p.20。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_/_icsFiles/afield-file/2010/12/28/1282000_02.pdf (検索日2016.9.14)
- (10) 太宰治(1900)「走れメロス」 青空文庫
http://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1567_14913.html (検索日2016.9.14)
- (11) 小学校学習指導要領解説 国語 p.99。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_/_icsFiles/afield-file/2010/12/28/1231931_02.pdf (検索日2016.9.14)
- (12) 本稿で述べた「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)は、2000年、2001年、2010年と3回、本稿執筆者が担当するクラス(クラス人数は20名弱)で部分的に実践した。【5】で説明した指導手順の①を「なりきり作文」で書かせたのである。課題は「30代前半の母親(父親)で余命半年と診断され、まだ幼稚園児の子供に、中学生になったときに読んでもらっ手紙を書く」であった。学生は真剣に取り組んでくれた。作品のいくつかをクラス全員の前で読んでもらったが、その行き届いた内容に、聞いていた学生はみな深い感銘を受けた。この極めて限られた経験しかないが、本稿で述べた「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)の指導が持つ「学生を成長させる可能性」を大いに感じたことを付記しておく。
- (13) 「語用論」とは、言語表現があるコンテキスト(文脈・場面)で使用された場合に、発話解釈がいかにしてなされるかを解明する学問である。ある表現が皮肉と解釈されたり、無礼と解釈されたりするのは、どのような言語内、言語外の要因が関係しているのかを解明する学問。

主要参考文献：

- 石黒圭 (2010)『「読む」技術』光文社新書
大沢在昌(2012)「小説講座 売れる作家の全技術」株式会社KADOKAWA
川西政明(2004)「小説の終焉」岩波新書
後藤明生(1983)「小説—いかに読み、いかに書くか」講談社現代新書
丹治愛(編)(2003)「知の教科書 批評理論」講談社選書メチエ
中条省平(2002)「小説の解剖学」ちくま文庫

野口芳宏(1988)「作文で鍛える(上)」明治図書

小学校学習指導要領(2008) 文部科学省 (平成20年3月告示 平成27年3月一部改正)

中学校学習指導要領(2008) 文部科学省 (平成20年3月告示 平成27年3月一部改正)

高等学校学習指導要領(2009)文部科学省 (平成21年3月告示)

小学校学習指導要領解説 国語編(2008)文部科学省

中学校学習指導要領解説 国語編(2008)文部科学省

高等学校学習指導要領解説 国語編(2010)文部科学省

(2016.9.27 受理)